

聖書:使徒の働き16章16～40節

説教:あなたもあなたの家族も救われます

はじめに

パウロとシラスはテモテを連れて伝道の旅を続けていた時のことです。目的の所に行くことができず何度もルートを変えなければならなくなりました。これは聖霊が道を閉ざしておられるのだと分かって、ではどこに行くべきなのかは知らされないで、大変困ってしまう。そんなある日、パウロがマケドニアに来て助けて欲しいとの幻を見て、神が私たちに召しておられるのだと確信し、エーゲ海を渡って今のギリシャにあるピリピという町に向かいます。そこでパウロが福音を語っていると、リディアという名の女性が熱心に聞き、この女性ばかりでなく家族も一緒に主を信じてバプテスマを受けました。聖霊が道を閉ざした意味も、パウロが見た幻は意味も、すべて一本の糸で結ばれるように、神の救いのご計画が見えてきました。それが前回までのあらすじです。

今日の所では、パウロはひどい目にあっています。最初の伝道旅行のときは、ユダヤ人から石を投げられて死んでもおかしくないようなひどい怪我を負いました。今回の旅行も、むちで打たれて足かせをはめられて牢に投げ込まれてしまう。けれども、これも神の御手の中で起こったことであるなら、そこにどのような意味があったのか。ともに見てまいります。

1 占いの霊につかれた女

1) 「救いの道を宣べ伝えている」

パウロたちは、当初からピリピの町に長くいるつもりはなく、その代わりユダヤ人たちが集まる祈り場に毎日かよって福音を集中的に伝える計画でした。ですから、リディアとその家族が救われたのは、町に到着した日か次の日のことだと思われま。そんな数日間の滞在にもかかわらず、大きな事件に巻き込まれてしまいます。祈り場に通う道の途中、占いの霊につかれた若い女奴隷が後ろからついてきて、「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えています」と叫び続けたことが事の発端でした。

2) 「この女から出て行け」

頼みもしないのに大きな声で宣伝をしてくれて、これは大助かり、と思いたいところですが、そうではなかった。パウロは大変な迷惑に感じて、

「イエス・キリストの名によってお前に命じる。この女から出て行け」と言ったら、ただちに霊が出て行きおとなしくなりました。せっかく宣伝してくれたのにどうしてと思う方もいるでしょう。同じようなことが福音書にも出て来ます。悪霊どもが「あなたこそ神の子キリストです」と叫ぶとイエスは悪霊どもを叱って、ものを言うのをお許しにならなかった。そのような話しです。悪霊はどんなに正しいことを言おうとも人を生かすことができない。イエスが、悪いものからは悪いものしか出て来ないと言われたとおりなのです。これを裏返せばこうも言える。信じて救われた者が福音を語るなら、たとえ言葉がたどたどしくても人を生かすことができる。そういう力をいただいているのです。

3) むち打ちそして投獄

さて、問題はここからです。19節。「彼女の主人たちは、金儲けする望みがなくなったのを見て、パウロとシラスを捕らえ、広場の役人たちのところに引き立てて行つた。」最近もニュースで騒がれているように、いつの時代も女性を食いものにする男たちがいます。彼らは腹を立ててパウロとシラスを訴えます。言い分はこうです。「この者たちはユダヤ人で、私たちの町をかき乱し、ローマ人である私たちが、受け入れることも行うことも許されていない風習を宣伝しております。」

ここにあるのはユダヤ人差別の発想です。これは他人事ではありません。日本でも似たような事が起きています。外国人労働者の悪いデマを流して日本から出て行けと叫ぶ人たちがいます。これと同じです。人の罪というのは、こういう形で表にできません。彼らの差別むき出しの怒りを受けて、パウロとシラスはむちで打たれて足かせをはめられて牢に投げ込まれてしまう。

4) 賛美した

パウロとシラスにしてみればとんだ濡れ衣ですから、言い訳をしていいはずですが。後でわかるように、パウロとシラスは立派なローマ市民権を持っています。ローマ市民権を持つ者は正式な裁判を受ける権利があるので、いきなり投獄されることはない。もしそんなことになれば、長官たちのほうが罪を問われる。ローマ市民権はカードゲームなら強力な切り札をです。ところが、そのことはなに

も言わず、むちで打たれて足かせをはめられ、一番奥の息も詰まりそうな汚れた牢に投げ込まれていく。なぜだろうと思います。それだけではありません。25節。「真夜中ごろ、パウロとシラスは祈りつつ、神を賛美する歌を歌っていた。ほかの囚人たちはそれに聞き入っていた。」ほかの囚人たちが、「静かにしろ」と言わずにむしろ聞き入ったというのですから、なにか普通ではない雰囲気があったのでしょうか。そうしたときに大きな地震が起きた。

2 看守とその家族

1) ひれ伏した

飛び起きて牢を見に来た看守は、牢の扉が開いているのを見て絶望してしまいます。囚人を逃してしまえば極刑に処せられると決まりがあったからです。てっきりパウロたちは逃げた者と考えて自殺を図ろうとします。それでパウロは「自害してはいけない。私たちはみなここにいる」と叫んでとどまらせる。看守は、牢の扉が開いているのを見たときも驚いたけれど、二人が逃げないで牢の中にとどまっているのを見てもっと驚いた。

2) 打ち傷を洗った

看守はおもわずひれ伏して、震えながらこう言います。「先生方。救われるためには、何をしなければなりませんか。」看守が真っ先に言ったことは、「救い」ということばです。目には見えない、自分たちには及びもつかない大きな力を持った存在が働いていると感じています。それを神と呼ぶのかどうかわからない。とにかくその大きな存在の前で、自分は死ぬしかない罪人なのだという実感が迫ってきたようなのです。それでパウロは言います。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」イエスは、私たちの罪のために十字架で身代わりとなってさばきを受けられ、信じるものを義とし、永遠のいのちを与えるために死からよみがえられた。その方を信じなさい。これを聞いて看守は、すぐに二人の打ち傷を洗います。町の人たちは、この二人がローマ人の風習を乱すとんでもない悪人たちだと言ったけれど、まったく違う。この人たちはなんの罪もないのに鞭に打たれ、なにも文句も言わず牢に入れられ、痛みと苦しみを耐え忍び、鎖が解けて扉が開いても逃げようとしなかった。傷を洗いながらそんなことを思い巡らしたのでしょうか。

そうすると何が見えてきたか。この二人の後ろにおられるイエスがはっきりと見えてきました。

自分は十字架のそばにはいなかったし、イエスという名前さえ知らなかった。けれども、確かに自分は神のひとり子であるイエスをむちで打ち、十字架にかけた者であると告白しました。

先ほど、パウロとシラスがどうして自分たちが無実であることを訴えなかったのか。切り札として持っていたローマ市民権のことをなぜ話さなかったのか。疑問だと言いました。これでおわかりでしょう。

そしてもう一つここで分かることは、パウロはローマ市民権という切り札を自分を守るという目的のためには絶対に使わない。その代わり、ほかの人たちが救われるのであれば積極的に使う。そういう信仰をもって伝道していたということでした。

3 救い

1) 何をしなければならないのか

多くの人たちは、救いという言葉は使わなくても、どうしたら幸せになれるかと考えます。けれども救われる本当の方法がわかりません。それでとりあえずお金を貯めるとか、社会で成功するか、とにかく目に見えるもので救われようとしません。道に迷って落ち着かないときがあれば、神仏に手を合わせてみたり、占い師のところに行って安心しようとする。こんなことを繰り返していますから、困ったときにだれもが真っ先に思い浮かべるのは、救われるために何をすべきかという発想です。では何をすべきなのか。「主イエスを信じなさい。」このひとことです。これを聞いてだれもが拍子抜けするでしょう。しかし、そうでない人たちもいる。自分は神のひとり子をむちで打って十字架につけた者であると感じている人たちにとって、これこそが本当の救いのことばだと受けとめることができます。

2) だれが救われるのか

最後に考えます。信じたらだれが救われるのでしょうか。まず看守がひれ伏して救いを求めました。そうしたら看守と看守の家族が救われました。振り返れば、リディアのときも同じです。パウロから福音を最初に聞いたのはリディアひとりです。ところが15節には、「彼女とその家族の者たちがバプテスマを受けた」とある。大きな地震が起きたとき、そこで起きることを目撃していたのは看守だけでした。家族は見えていません。けれども看守だけではなく、家族も一緒に救われていった。

これはどういうことでしょうか。ここには、家族の中で救われているのは自分ひとりという方がたくさんおられます。救われて欲しいと祈っていてもなかなか救われないので、悲しい思いをされている方もおられるでしょう。救いというと私たちはどこかで思い込んでいたかもしれない。救いは個人的なことで、自分ひとりのみに起きた出来事である。たしかにそのとおりです。でも今日の箇所は何を言ってるか。救いは決してたった一人のことではない。一人が救われたなら、その救いは家族にも及んでいく。これは旧約の時代から変わらない原則です。アブラハムが主を信じて義とされ救われた後、一族のものが割礼を受けて信仰者になっていったことが創世記に書かれています。

私たちがいただいている救いは、それくらいの力に富んでいます。その恵みをみなさんご家庭の中に運んでおられる。そのような働きをしてくださる主の恵みをもう一度仰ぎ見たいと思います。